

# ニューヨーク国連研修報告



# SGHニューヨーク国連研修

## A ねらい・目的

- 1) 「人との共生」をテーマとし、多民族の共生に向けて行動し続けるアメリカ合衆国を研修先として、多くの人々との交流を重ね、解決策を模索する。
- 2) 国際的に活躍する聖心女子学院関係者等の教育資源を活用し、新たな価値観や行動を生み出すことを目指す学習プログラムを開発・実施することにより、多様な価値観を認め、Dialogを重ねることによって課題解決の方法を創造するグローバルリーダーとなれるよう、その自覚の萌芽を促す。
- 3) 国連NGOとの連携を通し、「持続可能な開発目標 (SDGs)」について考え取り組むことで、グローバルな視点を持ち、社会的な問題等の解決に向けて行動を起こす動機となり、行動を変容させていく。

## B 実施内容

この研修の実施は高校1年次の2月に行っている。よって、その実施内容の報告は右のⅠ～Ⅲのように分けて行うこととする。

- |                         |
|-------------------------|
| Ⅰ. 2016年度の研修に対する事後学習の報告 |
| Ⅱ. 2017年度の研修に対する事前学習の報告 |
| Ⅲ. 2017年度のフィールドワークの報告   |

### Ⅰ. 2016年度の研修に対する事後学習 (2017年2月～継続中)

#### 1) 研修の振り返り

今回の研修を終え、振り返りのアンケートを記入・提出後、集計を実施した。反省点・改善点を明らかにし、現地でお世話になったシスターとのSkype通信時に共有を行った。

#### 2) 現地で学び、深めた内容を伝える発表とその成果

##### a) 校内に向けて

学んできたことを自分たちの言葉で表現することで、同世代の他の生徒たちの難民・移民・地球環境に関する問題に対する興味・関心を深めた。また、展示会場が校内の生徒にとって、研修に参加したメンバーに直接質問・意見交換をする場として機能することで、さらにその関心を広げ、学びを深めることにつながった。

①今回の研修で学んだ内容をパワーポイントプレゼンテーションとして発表 (3月)

②内容をさらに深め、学校祭にて展示発表 (7月)

##### b) 校外に向けて

国連NGO RSCJ at the UN (Religious of the Sacred Heart of Jesus at the United Nations) のウェブサイト、Youth 欄の記事に掲載するため、今回の研修報告書を英文で作成した。(別紙1) NGOの方でフランス語、スペイン語の訳をつけ、秋に掲載 (日本語訳と共に本校Websiteにも掲載)

訪問・交流先全てに記事を送付し発表の許可を得る際、先方より内容に関し下記の点において高評価を受けた。

①現地で学んだことを自分たちの言葉でわかりやすくかつ正確にまとめている。

②それぞれの機関における交流や体験の意味と重要性を理解した内容になっている。

③それぞれの生徒が感じた気持ちが率直に表現されると同時に、しっかりとした意見を持っていることが明らかな文章である。

## 2) アクション・プラン策定・実施とその成果

### a) アクションプラン

① 聖心女子大学で行われた東日本大震災の被災者を支援するためのバザーに、支援メッセージを添えて出品した。

② 聖ソフィア祭での展示において、資源の再利用を示唆するために、使用済みペットボトルを展示会場の装飾に使用した。

③ 「一人でも多くの難民の子どもたちを救いたい」という想いに基づき、手作りクッキーの販売を実施し、その売り上げの全額をUNICEF「シリア緊急募金」へ寄付した。クッキーは材料入手から包装、販売まで全てニューヨーク国連研修参加者の手で行い、各包装には難民に関する情報を記載したタグを付けて販売、情報周知と意識喚起を目的とした。



また、売り場に募金箱を設置し、一人でも多くの難民の子どもたちを救うため、募金の呼びかけを行い、同団体に寄付を行った。

### b) 上記アクションプラン①～③の実施による成果

① 国外だけでなく、国内にも目を向け、息の長い支援について理解を深め、行動を起こすことの重要性を学んだ。(本校の出品分の収益27,500円のうち一部に貢献できた。)



② ペットボトルの新しい使用方法を提示することで、ペットボトルに対する意識改革、また再利用の喚起につながった。





- ③ 右表に示したように「クッキーセール」の売り上げ・募金呼びかけにより、UNICEF「シリア緊急募金」に寄付することができた。

聖ソフィア祭（学校祭）	40,000円
友愛セール（バザー）	40,711円
クリスマスコンサート	19,900円
合計	100,611円

c) アクションプランの波及効果

活動を繰り返し行うことで、「クッキーセール」が広く認知され、校外からも下記のような反響があった。

- ①高校生新聞社より取材依頼があり、電話でインタビューを受け、高校生新聞251号に掲載
- ②北海道通信社より取材依頼があり、研修生2名でインタビューに回答
- ③北海道新聞社より取材を受け、2017年9月5日（火）の北海道新聞「地域の話」欄に掲載
- ④新聞の記事を見た北海道新聞社電子メディア局の方から連絡があり、難民についての周知活動を行っているシリア人難民で札幌在住の方を学校に迎え、全校生徒対象の講演会を実施した。

研修生にとって、自分たちの起こした小さな行動の種が、大きな木に成長する瞬間を体験する出来事となった。小さな一歩でも行動を起こすことの大切さとその有用性を理解した。また、自分たちの行動に自信を持つことができ、今後の活動への意欲を高めることとなった。

## II. 2017年度の研修に対する事前学習（2017年10月～2018年2月）

### 1) 参加者選抜

高校1年生全員を対象として下記の配布資料を参考に、その中から主張したいポイントを調査したうえで、その解決策や自分の意見を1200字のスピーチ原稿として完成させ、実際にスピーチを行った。その上で、事前に参加希望を募った生徒の中から10名を選抜した。

資料：①『私たちが目指す世界 子どものための「持続可能な開発目標」』

“The World We Want

—A Young Person’s Guide to the Global Goals for Sustainable Development”

発行：NPO法人 Save the Children

②『ミレニアム開発目標 世界から貧しさをなくす8つの方法』

著者：「動く→動かす」(NGO団体)

出版社：合同出版

③『教えてSDGs』

出典：朝日新聞（2017年5月10日～）



## 2) 方法と活動内容

### a) テーマによるリサーチと、そのまとめ発表

2クール実施した。1クール目は一人一つのテーマを分担し、書籍やインターネット、新聞や雑誌などを利用して情報を収集し、一人10分、レジュメ1枚の条件で発表を行った。相互に質疑応答を行い、不足については追加調査の上、報告を求めた。2クール目については、テーマは自分たちが不足を感じることを出し合い、その中から選ぶ形をとり、調査報告を行った。

現地の人々とのDialogを想定した時に必要と思われる知識の獲得と整理、的確な情報処理と発信の手段の獲得を目指した。

### b) レクチャーを通しての知識の蓄積と理解の深化

本校の教員から、調査だけでは補えない最新の情報や、専門的な知識を得る機会を設けた。レクチャーを通じて、多方面からのアプローチや判断材料を獲得することの重要性について生徒に認知させ、今後の探究活動に活かせるような気付きの機会とする。

### c) ディスカッション（3項目で実施）

テーマの内容にかかわらず、多様な価値観について受容し、また自分の考えを主張していく機会とした。また、社会的な問題の解決のための行動の糸口をとらえる機会とした。

#### 項目1：「現地で質問したい10の質問」

ニューヨークで出会う人々に、スムーズに自分たちの質問の意図が伝わるように、おおよそ10の項目にまとめた。聞くべきことの優先順位をつけること、項目の統一や削除などを自分たちで行うことで、合意形成の機会の一つとした。

#### 項目2：『種をまく人』の伝えたいメッセージとは何か

10名に課題図書として示した書籍について、その作者が伝えたいこと、またどうしてこの研修の課題図書となるのかということについて考え、意見を出し合った。研修参加の目的の再確認や、事後の活動の継続意識を高めるために実施した。

書籍名：『種をまく人』

著者：ポール・フライシュマン／著、片岡しのぶ／訳

出版社：あすなる書房

#### 項目3：「人との共生のために必要なことは何か」

自分たちが今後どのように動いて行ったらよいのか（アクションプランの構築）ということ踏まえ、現地で質問をしたいと思っていることについて、自分たちはどう考えているのかということを考えるテーマとなっている。

### d) ジャーナルの記載

自分の活動の記録を取ることで自分の学びの歩みと不足、今後の方策を立てる材料とした。また、必ず日本語と英語で記録を残すように指示し、小さな事柄一つでも英語で思考し文章を構築する訓練を行った。英語科のネイティブスピーカーの教員の添削を複数回受け、正しい表現方法を身に着けるように指導した。

## Ⅲ. 2017年度のフィールドワーク報告（2018年2月）

### 1) 引率・現地指導

引率 Sr. 田口保子（企画も兼務）、漆崎 琴

現地指導 Sr. Gwen Hoeffel、Sr. Sheila Smith、Sr. 山本千尋（聖心会）

### 2) 参加者

高1 グローバルクラス生徒 3名

高1 ソフィア・サイエンスクラス生徒 6名 （合計9名）

※体調不良のため、当日1名不参加となる。新千歳空港で離団。

### 3) スケジュール、実施内容の概要

[2/12 Mon]

- ①11:00 千歳空港集合
- ②15:20 成田空港出発
- ③15:30 New Ark Liberty空港到着（現地時間、予定より1時間早く到着）、宿舎へ移動

[2/13 Tue]

#### ①国連NGO RSCJ at UNにてオリエンテーション

講師：Sr. Sheila Smith（国連NGO “Society of the Sacred Heart at UN” 代表）  
Sr. 山本千尋（国連インターン）

※いずれも聖心会員（本校の設立母体である修道会）

内容：「なぜ聖心会が国連にNGOをもっているか」

「RSCJ at UNのステータス（ECOSOC国際連合経済社会理事会に意見を反映させることが出来る）について」等

#### ②国連事務局政治局アジア太平洋部（Associate Political Affairs Officer）による講話

講師：倉持奈央子氏（不二聖心卒業生, 49回生、聖心女子大・ロンドン大学大学院）

内容：「予防外交」－紛争を事前に予防する、紛争の悪化を予防する取り組みについて等

#### ③UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）スタッフ（Senior Policy Officer）による講話

講師：Ms. Dana Sleiman

内容：現在の難民問題、特にロヒンギャ難民を中心としたプレゼンテーション

途上国が難民の7割を受け入れている現実について等

難民に思いを寄せて「ふるさと」を歌う。

#### ④パトリック大聖堂（St. Patrick's Cathedral）見学

移民（アイルランド系）の方が苦しい生活の中からお金を出し合って建てた荘厳な教会で、その移民の方々、体調を崩し研修参加を断念した仲間、これからお世話になるの方々、待っている家族・友達・先生、難民や苦しむ人々のために祈る。

#### ⑤宿舎にて振り返り、分かち合い



[2/14 Wed]

#### ①妹校訪問・交流

姉妹校であるニューヨーク聖心(Convent of the Sacred Heart 91st Street)の先生方とホストシスターにご挨拶し、以下の活動を行った。

A) ABC Cassidy's Place訪問・ボランティア

姉妹校の生徒とともに、ハーレムの子どもたちが普通の生活体験をし、必要なケアを受けるための保育所であるABC Cassidy's Placeでボランティア活動を行った。

B) 授業参加・ホームステイ

ABC Cassidy's Place訪問から姉妹校へ戻った後、それぞれのホストシスターとともに授業に参加した。校内を丁寧に案内いただきながら、姉妹校ながらの共通点や相違点を実感した。放課後はホストシスターと下校し、ホームステイをさせていただいた。



[2/15 Thu]

①姉妹校再訪

お世話になった先生方、ホストシスターにお礼の挨拶をし、合唱「ふるさと」を披露した。聖アグネス教会で祈りの時を持った。

②国連広報局(D P I)訪問・講話

講師：Mr. Felipe Queipo (NGO課スタッフ)

内容：国連広報局とNGOとの提携の目的

情報の力と人々の尊厳、教育の大切さ

世界人権宣言70周年企画の紹介 等

③国連NGO Officeにてシスター方とセッション。

一人ひとり昨日から今日午前までのふりかえりを分かち合う。

Mr. Queipo提案の世界人権宣言70周年の企画を世界の姉妹校に呼びかけ、自分たちも参加することにする。



④国際連合日本政府代表部（国連日本大使館）訪問・講話（Sr. Smith、Sr. 山本同席）

講師：総務部岸守一参事官

内容：『国連』を通して見えてくる風景

- ・大切なのは「自ら発信するのではなく、相手に発信してもらうこと」
- ・日本の国連外交、安全保障理事会、国連PKO等への協力、SDGsの説明
- ・緒方貞子さんとの出会いにより目覚めた難民問題、現在の取り組み（「難民はかっこいい」）の紹介等
- ・講話後、「ふるさと」を披露

その後、同大使館で2017年10月から働く本校33回生の新目久美子さんから学生時代のことや留学体験、現在の仕事などの話を伺う。

⑤聖家族教会で振り返り後、宿舎で翌日のfacetimeの準備を行う。

[2/16 Fri]

朝、Church Centerの聖堂で祈りを捧げた後、Sr. Smith、Sr. 山本と合流。

①Japan Society訪問・講話

講師：長澤裕美子氏（教育ファミリープログラム教育事業シニアオフィサー）

Ms. Pauline Noyes（同上）

内容：日米の文化交流事業、若い世代への文化交流教育プログラムについて等

②国連本部（国連パスポートを取得）訪問

- ・ハマーショルド記念瞑想室で祈り
- ・平和の鐘見学
- ・国連ツアー（日本語）参加

今回日本語ツアーを企画してくださった澤麻紀氏（昨年DPIで講話）と再会しお礼を述べ、国連子どもの日催しを見学。その後国連ガイドツアー参加、国連の取り組みや現場の様子、また巨額な軍縮費が如何に平和への努力を蝕んでいるかを実感できた。



③国連NGOオフィス訪問

Sr. Hoefelの金祝を祝い、One Little Candleを歌い、イザヤの預言を暗唱をした。

④Face Time交流

札幌にいる生徒との間で、難民条約の定義や移民・難民の受け入れに関して質疑を交わした。

[2/17 Sat]

①エリス島の移民博物館見学

聖心会元総長Sr. Kathleen Conan, Sr. Smith, Sr. 山本が同行。

移民の方が実際に生活していた宿舎を見、気持ちを想像し、自らの身に引き比べて考えることでこれまでの調べ学習の意義が深まった。

②聖マラキー教会にて今回の研修の振り返り

③タイレストランにて振り返りと分かち合い

指導いただいた4人のシスター方にこれまでの学びと振り返りを英語でご報告。花束をお渡しし、「ふるさと」を歌い、感謝の集いを行った。

[2/18 Sun]

10:25 New Ark空港出発

[2/19 Mon]

14:50 成田空港到着

振り返り

- ・グローバルリーダーとは何か
- ・SDGsは自分にとってどのような意味があるか
- ・国連研修の意義について



17:55 成田空港出発

19:40 羽田空港到着、解散

[2/21 Tue]

10:00 羽田空港出発

0:00 新千歳空港到着、解散

## C 評価・検証

### 1) 2016年度研修の事後学習についての評価・検証

①事後学習を行う前と後の研修生の意識と状態の変化は次の表のとおりである。

事後学習前	事後学習後
事後学習の内容がイメージできない	事後学習では、「学んだことを自分の知識にすること、またそれを活用し、自ら行動することの重要性を学ぶ」ということを理解している
アクションプランとは何か、はっきりと理解しておらず、説明できない	アクションプランとは、「見出した課題に対し、どんな行動を起こす必要があるか、その行動の実現性と有用性を検討し計画を進め、自ら行動を起こすためのものである」と理解している
難民が置かれる状況の過酷さと自分たちの置かれる状況との差を痛感し、「このままではいけない」という感情を抱いている	難民を救うために、自分たちにもできる支援とはどういうものなのか、例えば小さな一歩であっても、踏み出すことで周囲に影響を与え、自分たちの想像もしない大きな力となる場合があることを経験に基づき実感している
ニューヨークでの研修を終えて、多くを学んだ充実感を味わっている	研修で学んだことをまとめ、発表・共有することや、学びを基に自らの考えを持ち行動に移すことを繰り返し行うことで、「自分たちは始めの一歩を踏み出したに過ぎない」と感じており、今後の活動へ意欲を持ち、未来に意識が向いている

②課題設定において、SDGs（持続可能な開発目標）を意識し、長期的な展望で物事を見通す力が身についた。

③取り組みにあたり、論理的に思考を組み立てることや、根拠を示して説得力を持たせることを強く意識して行動するようになった。

④社会に所属する一員として、ふさわしい言動を心掛けるようになった。（文書の書き方、電話の応対、訪問の際の態度や言葉）

⑤情報収集や発信の方法として、情報機器類の技能向上がみられた。

⑥アクションプランの実施について、連携先の都合により週日に実施せざるを得ないことや、夏休み期間中の実施が望ましいとしながらも11月以降にも実施がずれ込むなど、長期間における取り組みとなった。実施機関の設定等、現実的な期間を考慮していく必要があった

#### ⑦今後の予定

高校3年次において、Global Issuesの授業で「地元企業と連携をし、社会に変容を起こすためのアクションプランを計画し、実行すること」が求められる。その活動をこのNY国連研修で学び得たことを活用し、これまでの活動の集大成となるよう新たに計画をする予定である。

## 2) 2017年度研修の事前学習についての評価・検証

事前学習開始直後（10月）と、研修直後にループリック評価（資料 高1-A）を実施した。

### ①自己評価が上昇したポイント

A) テーマ設定とリサーチを行う際に、情報の取捨選択において、その情報の真偽について意識を高め判別するようになった。

（評価平均）出発前 3.0 → 帰国後 3.8

B) 調査を書き出したメモに優先順位をつけ、伝えたい内容に応じて活用できるようになった。

（評価平均）出発前 3.2 → 帰国後 3.7

C) 口頭発表において、レジユメの内容以外に適宜情報の追加を行えるようになった。

(評価平均) 出発前 1.6 → 帰国後 3.0

※ルーブリックの評価基準の最高値は「3」である

D) フィールドワークにおいて、相手の話に耳を傾け、積極的に情報収集に努める。

(評価平均) 出発前 3.3 → 帰国後 4.0)

②自己評価が変動しなかった、もしくは低下したポイント

・情報の収集において、多言語を意識して情報源を求め活用できた。(評価平均値0.2低下)

ルーブリック評価では14の項目があるが、そのうちの13項目において、自己評価は同値もしくは上昇傾向が見られた。約4か月に渡る事前学習の中で、何を意識して学習を進めればよいかということの的確に把握できるようになってきている。また、前期のフィールドワークのためのリサーチに比して、提出の締め切りやその内容の深度について厳しいものとなっていることもあり、それをやり遂げた達成感が自信につながって、解答にも上昇傾向がみられると考えられる。

唯一低下したポイントである他言語利用については、異文化を理解するためには多言語が必要であるということを強く意識し、ニューヨークの滞在期間の中で不自由さを実感したからこそ、自らの不足を厳しく評価したと考える。今後の学習意欲を喚起することにはなっている。



## Questionnaire on Sapporo Sacred Heart SGHUN study tour to New York

February 2018

クラス SSC・GC 番 名前

---

これはNYのシスター方から送られてきた質問です。クラス・番号・名前を明記してください。回答は答えを□で囲み、理由等は下線部に書いてください。引率が応える部分やわかっている部分もあるので、\*印の質問は意見がある場合のみ書いてください。提出の仕方は最後に書いてあります。3月末のスカイプでお伝えするまでに訳さねばならないので、3月8日までに(4)の質問A以外を記入したこの用紙を各クラスリーダーに提出してください。また、(4)の質問Aの毎日の流れは情報センターの所定の場所(白板に指示)に3月9日までに打ち込んでください。(英語で書ける部分は英語で書いて下さい。)引率が目を通した後、3月13日放課後に通学生のOさん、Kさん、Sさんに集計して頂きます。(当日三人はお弁当を持参してください。)

### 質問

1) General rhythm of the trip --①too tiring, ②too much free time, ③just right?

(①~③のどれかに○をつける。①、②とした人は理由を書く。(2)以下の質問も同じ)

---

2) Was having three focus areas (UN, exchange, refugees /immigration) ①too much for a five-day trip? ②not enough? ③just right?

3つのテーマ：国連、姉妹校交流、難民/移民 は5日間のプログラムで多すぎたか、足りなかったか、丁度良かったか。

---

3) Was it good to have 5 days instead of 4?

1日増えて5日になったことは良かったか。4日でもよかったか?

How much did you suffer from jetlag?

時差ボケでどれぐらい苦しんだか。

---

4) Content of the trip : general flow of each day (研修内容：毎日の流れについて)

A) How did participants experience day 1, day 2, day 3, day 4, day 5 ?

5日間の体験は？1日目、2日目…と分けて書きましょう。(情報センターのファイルQuestionnaire用日誌に打ち込み印刷して提出)

B) Should we add or delete anything, make visits longer, shorter

プログラムに付け足したらよいもの、やめたらよいものはあるか

---

C) Was schedule too cramped?

スケジュールはあまりに詰め込みすぎか。

---

D) Was there too much of the same message?  
同じメッセージばかりだったか。

---

E) Feedback on quality and content of the speakers  
講話の内容と質についての意見

---

\* F) Was preparation done in Japan adequate?  
日本での準備が研修につながったか。

---

\* G) Was 1 day of sightseeing in Ellis Island enough?  
エリス島の見学は十分だったか。

---

H) Were evenings sufficiently filled?  
夜のスケジュールはこれでよかったか。

---

I) Was there enough room for reflection and journaling? And prayer?  
ふりかえりと日誌をつける時間は十分あったか、祈りの時間は？

---

\* J) Evaluate closing evening  
研修最終夕(2月17日タイレストラン)について

---

K) Was wrap-up life-giving?  
最後の振り返りはこの体験(あなたに)に命を吹き込むものだったか(活気づけるものだったか)

---

\* L) Accommodations in hotel? ①Good or ②need a change?  
(シスターメイヤーはこう聞いておられますが、半年探し、現地でもあちこち探してここしかなかったので変わることはありませんが、何か希望があったら②を選び、希望と理由を書く。

---

5) Evaluate meals: breakfast, lunch and dinner. Are there any meals that stood out for you?  
食事について:あなたの印象に残った食事、又は感想がありますか。

---

\* 6) Evaluate transportation - was traveling by subway in a large group doable?  
移動手段は地下鉄と歩きしかないが、グループで移動することに関して何か提案がありますか。

---

\* 7) Were the gifts you brought from Japan the right ones, adequate? Is there anything you had wanted to have instead or in addition to?  
お土産に関して提案があれば書いてください。

---

8) Is there anything you commented on afterwards "Oh, if only ..." that should be taken into account for future trips?  
「こうだったら」とか「来年はこうしたら」ということがありますか。

---

9) Put in your own words the spirit and purpose of the study trip. Upon reflection what are ways you may have behaved differently?  
研修の精神と目的を自分の言葉で書いて下さい。自分は今よりこう行動したらよかったということがありますか。

---

10) What were your goals and have you achieved them?  
研修にあたりどんな目標を設定しましたか。また達成できましたか。

---

回答の提出日は3月9日の帰りのSHRです。答えは日本語で紙媒体で提出してください。

#### **これからの課題**

Question : What action are you going to take, or have you taken?  
研修の結果どんな行動をとりましたか。取ろうとしていますか。  
→事後研修の大部分がこれに集約されます。

Request : Please send your report on the study tour.  
この研修の文集と要約  
→事後研修のその他の部分がこれに集約されます。

Also please get permission from their parents to have their comments (first names only are mentioned) and photos (send 3-4 photos.)

保護者の方から皆さんの写真(3~4枚)やコメント等をHPに載せる許可を頂いて下さい。

Also please create 2 pages material for our homepage by yourselves. We need to have shorter version as the pages have to be translated into French and Spanish and the ones volunteering the job is really busy, so make it short.

また、国連NGOのHPにのせる2ページの原稿を作ってください。(来学年度でよい。日本語まとめ役：Aさん、英語まとめ役：Sさん)

### 報告会用パワーポイント作成

4月20日までに作成、まとめ役？

### 情報センターでの打ち込みに関して

Brothers 2 > Share > 2018年度高1 国連研修 > 事後

### 記録 (1日目から各自の担当)

日本語 3月9日迄

英語 4月14日迄

### 作文

担当者は？

3月9日期限

### Questionnaire 4 の A 毎日の流れ (毎日のふりかえりや記録をもとに)

日本語 3月9日迄

英語 4月14日迄

### 全体のふりかえり

2月17日のふりかえり、成田での振り返りを参考に

グローバルリーダー、SDGs、この研修の意味 (聖心の教育と国連の使命の関係) 等も含めて

日本語 3月9日

英語 4月14日

### アクションプラン

Twitter と世界人権宣言以外のものは今からでも記入し始められる人は記入するが、来学年度でよい。今からAction Planの一部でも考えられると来年度がとても楽になります。

その他随時フォルダーを作成する。



# 本校の外国語教育について



## 本校の外国語教育について

英語科

### 【外国語教育】

今年度は昨年度に比べ、コミュニケーション英語においては各学年とも職業選択、環境問題、日本における社会問題などテキストで扱われる内容に即して、グループで話し合いを行い、その結果を発表する機会をできるだけ多く持たせるよう工夫した。同様のことはネイティブ教員による英語表現、英語会話の授業の中ではすでに行われているが、さらに英語を使う機会を増やすことを目的として取り組んだ。グループを作る条件としては同程度の英語レベルであることを優先し、文法事項にとらわれず各々のレベルで自由に英語を使うことを目的として実施した。自分の意見を英語でどのように表すかということは即興型英語ディベートにおいても必要な要素であり、このような活動は即効性はなくとも、継続的に取り組むことによって、生徒たちの英語のコミュニケーション力の向上につながっていくものとする。

本校で受験を奨励、導入している実用英語技能検定、GTECの結果においてもリスニングを含めた英語運用力には効果が表れ始めているのではないかと思われる。

### 【実用英語技能検定】

2016年度、2017年度の本校実用英語技能検定（英検）受験者の2級、準1級、1級取得者数、取得率を概観すると、以下の表1のようになる。

表1)

	2級	準1級	1級
2017年度取得者数 (在籍100人)	40人 (単得率40%)	1人 (取得率1%)	2人 (取得率2%)
2016年度取得者数 (在籍87人)	29人 (取得率33%)	1人 (取得率1.1%)	3人 (取得率3.4%)

今年度の本校における2級の取得者は昨年度に比べ11人増え、率にして7%伸びた。が、その反面、準1級、1級の取得者は1～3人とどまり、今後の課題となっている。特に準1級、1級で不合格となる大きな要因としては、語彙力、読解力の不足が否めない。これらの力を伸ばすために単語テストなどを日頃の授業の中で実施しているが、年々増加する覚えることを苦手とする生徒には苦痛であり、諦めて全く取り組まなくなってしまう者も見られる。少しでも生徒たち自らが進んで取り組む方策として、多読を取り入れることが考えられる。朝礼前の読書の時間に必ず各自のレベルに応じた英語の本を図書室から借りる、または自宅から持参し、継続的に5分程度英語に集中することによって、語彙を定着させることができるのではないかと思う。

また、使用テキスト Progress21 Revised の他に副読本を導入し、文章を読みながら語彙の知識を広げることも必要と思われる。Progress21 Revised の内容はアメリカ、イギリスの歴史、習慣などを学習段階に応じて取り上げ、大変示唆に富むものではあるが、科学を題材とした現代社会、医学などの分野に関する内容に乏しい傾向が見られる。従って、このような内容の英文に触れることは理系

大学進学希望者のためには有効であり、授業で扱う文章は様々なジャンルのものを取り入れ、合格者の底上げをはかりたいと思う。

さらに表2を見ると、各級において1次試験に合格した者は、たとえ準1級、1級であっても2次試験を経て最終的な合格に至る割合が非常に高いことがわかる。日頃の即興型英語ディベート、ネイティブ教員、海外姉妹校からの留学生との交流などによって蓄積された、相手の質問を聞き取り即座に応答する力がコミュニケーション力として身につけている結果と推察される。

表2)

	2級	準1級	1級
2017年度 第3回 1次合格者の2次合格率	100% (受験者11人)	100% (受験者1人)	--- (受験者0人)
2016年度 第3回 1次合格者の2次合格率	100% (受験者1人)	0% (受験者0人)	100% (受験者1人)

高校卒業時までに英検準1級の取得を目指すことは、まだ道半ばである。が、active dialogue の基礎となるべきコミュニケーション力はしっかりと生徒たちが身につけたものと思われる。

#### 【GTEC for STUDENTS】

次に、本校で6月に高2、高3、11月に高1、高2が受験しているGTEC for STUDENTSに於て、現高2の今年度、昨年度の結果をトータルスコアと3技能別に概観すると以下の表3のようになる。

表3)

	トータル	リーディング	リスニング	ライティング
2017年11月実施 高2平均スコア(34人)	519.8 (前年比+60.2)	181.9 (前年比+20.3)	218.4 (前年比+31.4)	119.6 (前年比+8)
2016年11月実施 高1平均スコア(37人)	459.6	161.6	187.0	111.6

転出、転入により人数に若干の違いがあるが、母集団としては大きな変化はない。これによると、3技能の各スコアが、わずかではあっても伸びていることがわかる。特にリスニングにおいては30以上のスコアの伸びが見られ、英検の2次試験での合格率の高さと同様、コミュニケーションにおいて重要な、相手の発言を理解する力の土台がしっかりと構築されつつあることを示している。また、リーディングにおいても20程度、ライティングにおいても8、スコアが伸びている。これは、授業などで英文に触れ内容を理解する活動、またネイティブ教員による英語エッセーの書き方指導なども少しずつ効果が表れ始めていると言える。来年度はさらに高3対象に大学に Academic Learning Skills という授業を設定し、さらにリーディング、ライティングの強化を図る予定である。

また、表4のトータルスコアの成績分布を見てみると、生徒の成績を個別に見ると、2016年度に比べ2017年度のほうが、より高いスコアの者が増えていることがわかる。



表4)

グレード	スコア	2017年度人数	2016年度人数
7	710 ～	3	0
6	610 ～	5	6
5	510 ～	4	3

グレードは7段階に分類され、昨年度は0であった「大学での専門教育を英語で学べるレベル」とされるグレード7が3人となり、「海外大学を視野に入れることができるレベル」のグレード6、「海外の高校の授業に参加できるレベル」のグレード5を含め、着実に実力を伸ばしている層が少しずつ増えている。海外高校への長期、短期の留学を希望する生徒の数も増加、大学進学に向けての必要性による語学習に対する意欲の高まりが相乗効果となり、スコアアップにつながるケースが増えていくことが今後も期待される。

また、次年度よりスピーキングテストも取り入れ、語彙力とそれを実際に運用する力を、ネイティブによる成績評価、即興型英語ディベートでのルーブリック評価に加え、生徒が自らのコミュニケーション力を確認する機会を増やす予定である。生徒自身が結果を励みとして、日常的な表現にとどまらず、さらに様々な分野にわたる専門的な内容、それに対する自らの考えを英語で表そうとするきっかけになることを期待している。



# 教科・科目への導入





## 教科・科目の指導への導入

本校では従来から主体的な学びを生徒に求め、それを重視してきた。SGHの指定が取りざたされた折には、これまでの本校での取り組みを十分に生かすことができ、なおかつ発展させる機会であると捉えて応募し、指定に至った。各学年とも「総合的な学習の時間」と、1年生は「コミュニケーション英語Ⅰ」を、2・3年生は「社会と情報」をそれぞれ学校設定科目「グローバルイシューズ（GI）」に統合し、SGHの趣旨を反映した指導を展開している。本校は併設型中高一貫校であり、教員はそのいずれかに所属しているが、教科・科目の指導においては所属の区別に関係なく、ほぼ全教員が中学および高校両方の教科指導にあたっている。また、GIの指導においても同様である。それぞれの教員がGIの指導で得たノウハウを何らかの形で生かし、教科・科目の指導にもあたっている。その中でも、GIのメインテーマの一つである「自然との共生」での取り組みが、理科の学校設定科目である「環境科学」へどのような波及効果をもたらしているかについて紹介することとする。

### 【導入教科・科目】

教科	科目名	単位数	開講学年
理科	環境科学（学校設定科目）	2	高3

### 【科目開設の経緯と現状】

文部省（当時）から「環境のための地球学習及び観測プログラム（GLOBE）」の指定を受けたことをきっかけとして1999（平成11）年度に開設された。以来20年間に渡り、これからの時代に生きる人間として環境問題に目を向け、理科的な素養を身につける機会を設けるという目的のもとに開講し続けている。この科目は、同一法人に属する姉妹校である聖心女子大学への姉妹校推薦希望者や、その他の私立大学への指定校および公募推薦希望者を中心として選択されている。早期に進路が確定されるメリットや、いわゆる受験勉強に追われることがない学習環境を生かし、いわゆる探究型学習を展開している。

### 【科目の目的】

- （1）地球温暖化をはじめとするさまざまな環境問題に目を向ける。
- （2）環境問題が生態系を構成する非生物的環境に対して及ぼす影響について知り、またそれが生物に及ぼす影響について知る。
- （3）悪化している環境問題を身近な問題と捉え、その改善を図るための実効策を検討する。

### 【指導内容】

筆者が「環境科学」を担当するようになったのは2年前である。それまではいわゆる検定教科書を用いない科目を担当した経験はなく、この科目を担当することが決まったときには、どのように授業を展開していけばよいか大変戸惑ったことを覚えている。しかしながら、当時の教科主任より「教科書がないからこそ、この科目の目的を外れなければ担当者の裁量を生かした授業が展開できる」という後押しを受けた。そこで、SGHの指定を受け始まったGIの自然との共生と連動させようと考えた。また、講義形式の授業は当科目にはなじまないと考え、ゼミ形式での授業展開や、GIで導入済みであるディベートやプレゼンテーションも導入することとした。以下に、具体的にどのような授業展開を行ってきたかを紹介する。

### (1) 環境問題の相関図作成とゼミ

まずは今起きている様々な環境問題に目を向けることや知ることを目的とした。原因となることや、引き起こされている具体的な問題と影響について関係性を調べ、相関図を作成させた。担当した1年目は特にどの環境問題とは指定せず、自由にその関係性を図に表すよう指示し、受講した生徒一人一人に自分が重要だと思うことを主張し、それについて論じ合った。しかし、取り上げた環境問題が広範囲に渡り、その原因や影響も多岐に渡ることとなり、それがかえって主張や論点をぼやけさせてしまう結果となってしまった。そこで2年目は、いくつかのキーワードを用意し、なおかつ環境問題に詳しくない人にもその相関関係を理解してもらえよう簡潔にまとめるよう指示した。この科目の選択者が必ずしも環境問題に詳しいとは限らないので、これらの指示は有効に作用した。

### (2) ディベート

G Iの「自然との共生」との関係性を考慮したテーマを設定した。すでに1年次に日本語によるディベートを経験済みであるため、進行はスムーズに行うことができた。また、ジャッジにはループリック評価を用いた。ループリック評価の観点はディベートを始める前にあらかじめ提示しておいた。1回目のディベートが終了した後、生徒から評価の観点の差異が今ひとつ明確ではないという指摘があり、なおかつその見直しを自分たちにさせてもらいたいという申し出があった。評価について、その観点の設定を生徒に任せることには抵抗も感じたが、まずはやらせてみようとも思い、任せてみた。生徒から示された観点はシンプルかつ差異もわかりやすく、評価者(教員)としての立場からも納得のいくものが提示され、それを採用することとした。

実際にディベートを始めてみると、その主張の中に専門的な用語が飛び交うなど、肯定(賛成)側、否定(反対)側双方が互いの主張を理解できていない場面が出てきた。これについても相関図の作成のときと同様、誰にでもわかりやすく理解してもらえようということを前提にすることで解決した。また、生徒からは主張したいことを限られた時間で表すことの限界について指摘があり、その解決策としてパワーポイントを導入した。ただし、その導入にあたっては示す内容を簡潔にすること、作成に時間と労力を費やすものにならぬよう条件をつけた。G Iをはじめとする様々な科目の授業でプレゼンテーションに慣れている生徒たちは要領を得ており、上手く活用できていた。

ディベートは、下図に示す流れで行った。ディベート後に行われる「振り返り」では、主張した内容や論点について良かった点や今後のディベートに向けて改善が必要な点を生徒どうしで指摘しあうということに取り組んだ。

ディベートの流れ	①テーマの提示 ②調査(グループ内で調査項目を割り振り) ③論の構成 ④資料作成(パワーポイント等) ⑤ディベート ⑥振り返り
----------	--

また、提示したディベートのテーマは以下のとおりである。

ディベートのテーマ	①日本のゴミ焼却施設を減らす、賛成か反対か ②ゴミを輸出する、賛成か反対か ③自動販売機の数減らす、賛成か反対か ④旬に関係なく野菜を栽培する、賛成か反対か ⑤内燃機関を使った自動車を減らし、 電気自動車の普及を目指す、賛成か反対か
-----------	---

### (3) 調査・研究

「バイオエタノールの可能性を探る」をテーマとした調査・研究活動とプレゼンテーションを各々の生徒が行った。ミドリムシの活用を中心にバイオエタノールの製造に関わる環境への負荷についてや、カーボンニュートラルとは何かについてを中心に知識の共有につなげることができた。

### (4) 川柳・俳句づくり

日本史の授業で行われていることにヒントを得た。この科目の授業の締めくくりとして、環境問題について知ってほしいこと、訴えたいことをストレートに言葉で表すのではなく、読んだ人がその言葉に隠されている環境の問題について思いを馳せることができるようなものを詠むこととした。担当した一年目は川柳としたが、TBS系列で「プレバト」という番組が放送されており、そのコーナーのひとつである俳句の才能査定ランキングを見ている生徒から、季語を入れた俳句をつくってみたいという声が上がリ、二年目は川柳または俳句を詠むこととした。俳句を詠むことは川柳を詠むことよりも格段に難しいらしく、挑戦した生徒も苦勞していたが、なかなかの力作に仕上げられた作品も登場した。

## 【図書館・情報センターとの連携】

本校の図書館には専任の司書が置かれている。本校の図書館には書籍だけではなく、新聞の切り抜きなど資料が豊富にそろえられている。これは、事前の打ち合わせによって司書が適切な資料の準備をしてくれているおかげであり、この科目の授業の支えとなっている。生徒への指導にも協力をお願いし、調べを進めるうえで適切な助言やサポートを与えていただいている。また、ディベートを行う際にはジャッジの一員に入っていたりもしている。ICTの活用については筆者の力及ばぬことも多く、生徒の方が機器の操作をはじめとしてその活用には慣れている。そのICTの活用においては、情報センターにも多大な協力をいただいている。

## 【評価・検証】

ディベートで取り上げたテーマの一つである電気自動車の普及に関して、報道で世界各国が将来的に生産台数または販売台数のうち相当な割合を電気自動車とすることが取り上げられており、生徒もそれを知っていた。電気自動車からは二酸化炭素や窒素酸化物、硫黄酸化物などの排気ガスが出されず、環境問題の改善につながるという理屈も理解している。しかし、調べを進めていくと結局は必要な電力をまかなうには化石燃料の消費は避けられないことに気づく。しかも、電気自動車の普及ともなれば必要な電力量は今以上に増加し、化石燃料の消費増大も想定しえる。たとえ原子力発電によりまかなったとしても、東日本大震災で起こった原子力発電所の事故の例から、地球温暖化や酸性雨などとは違った意味での環境問題が起こりうることに気づいた。このような例から、物事を多角的に見る目、捉える力、その相互関係を思考する能力を育てることができていると考えられる。

環境に関わる内容は中学理科や高校理科（生物）の教科書でも扱われており、学習指導要領や教科書の改訂の度に扱う内容や分量も増えており、生徒はそれらを学習済みではある。一方で、授業の標準時数や単位数が増えている訳ではないため、様々な環境問題とその原因や影響に関する「つながり」を考えてもらうには時間が足りていないのが現状である。それを補うという役割をこの科目は担っているといえる。

社会科や地歴科・公民科、家庭科、保健体育科などでも環境に関する分野が扱われており、内容が重複している部分もある。あくまでも筆者の私見ではあるが、中高一貫校である本校では各教科・科目の指導内容を体系化し、環境に関わって重複する部分を含めてこの科目に一本化して指導することも可能ではないかと考えている。また、現在は高校理科の一科目として開設されているが、学校設定教科の一つとしてこの科目を開設すれば、理科教員だけではなく他教科の教員との連携のもとに指導することも可能である。実現に向けてはいろいろな難題もあるが、特色ある教育活動の展開やグローバル社会を生きる人間を育てるという目的を達成するためには検討の余地はあると思

われる。

本校においては、SGHの指定が来年度で終了する。この科目を以上述べてきたように展開できたのは、SGHの指定により取り組んできたGIの下支えがあったからこそである。指定終了に伴い、その下支えがなくなったときにこの科目の指導内容やどのように展開するかは課題となるであろう。また、先にも述べたように教科書がないからこそその自由な発想で指導する内容を決定し、展開できるのがこの科目の良さである反面、担当者が変わることによって指導内容の一貫性という点では問題が残る。いずれにしても、この科目の指導内容や展開にSGHで取り組んできたことを反映し、継承していくことを検討していかなければならない。

# 關係資料



【別紙様式 5】

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	さっぽろせいしんじょしがくいんこうとうがっこう				②所在都道府県	北海道
26～30	①学校名	札幌聖心女子学院高等学校					
③対象	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
学科名	1年	2年	3年	4年	計	全日制課程普通科 106名 中学校 82名	
全日制普通科	27	39	40		106		
(中学)	(29)	(30)	(23)		(82)		
⑥研究開発構想名	Active Dialog - 共生の実現へ -						
⑦研究開発の概要	<p>1. 本校が放課後に、また、後に総合的な学習として実施してきた課題研究をさらに強化する。</p> <p>2. 課題研究のテーマを「人との共生」、「自然との共生」の2つにしぼり全研究を整理統合する。</p> <p>3. 海外研修の目的・成果を2つの主題別にまとめる。</p> <p>4. 英語コミュニケーション能力をさらに強化する研究・研修を行う。</p> <p>5. 論理的思考力と発表能力をもつグローバルリーダーの育成を目指す。</p>						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標 本校の研究開発テーマを「人との共生・自然との共生を目指し、諸課題に挑戦する」として、課題分析能力とプレゼンテーション能力の定着を図り、グローバルリーダーの育成を目指す。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説 2014(平成26)年度入学生の段階から論理的思考力、問題設定・解決能力の一層の向上を図っていく必要があると考えられ、これらの生徒が新しく設定した課題研究に取り組み、共生の観点から研究と実践を進め、それぞれの主張を発表し、まとめていくことによって、論理性のある問題解決能力を身に付けることが可能になると考える。</p> <p>(3) 成果の普及 ①本校での利活用 ②大学・企業等へのはたらきかけ ③小学校との協体制づくり ④他校への情報提供 ⑤保護者の理解促進</p>					
	⑧-2課題研究	<p>(1) 課題研究内容 主題を世界的な課題である①「人との共生」、②「自然との共生」の2つにしぼり、下記のような展開を考える。</p> <p>①「人との共生」 a) 少数民族の国を設定し、身近なアイヌ民族との状況比較を基本に共生への課題を追究するため、多数民族との関係、国家政策との関係における現状と問題点を探る。</p> <p>b) 難民と移民について調査の対象国を選定し、各国の受入れ状況とその対策を共生の課題として追究するため、世界から移民や難民にまつわる争いや摩擦が消えない背景要因と現状の問題点を探る。</p> <p>②「自然との共生」 a) 3R運動の源としての資源確保について、資源との向き合い方に問題意識を持ち、エネルギーや水資源の確保と環境問題についての問題点を探る。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 ①実施方法 2014(平成26)年度入学生より学年進行で実施する。2014年度については、総合的な学習の時間、2単位)で実施する。2015(平成27)年度以降</p>					



	<p>については、各学年2単位での実施を基本とし、「人との共生」「自然との共生」のテーマ追究のために、学校設定科目を新設した独自の教育課程を編成する。</p> <p>② 検証評価方法  すべての取組の前に、「その目的」、「つきたい力」、「望ましい姿」などの細目が記載されたルーブリックを示し、生徒自身が到達目標を具体的に理解する。</p> <p>※課題解決の情報を得るため、国際機関NPOや国連などを訪問する。  ※共通の問題と、個別の問題に整理したうえでまとめ、対話と和解等、共生の視点で提言、発表の準備を行う。</p> <p>③ 課題のまとめと、その提言  取り組みを通じた結論についての発表、報告、提言を校内、或いは校外で行う。取組み後に、評価のためのアンケートを実施し、個々の生徒が自らの意識や行動の変化を自覚する場とする。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等  なし</p>
<p>⑧ -3 上記 以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価  授業外の時間及び海外研修、課題研究の研究主題「人との共生」「自然との共生」に関わる研究を通して、他者に対する奉仕や思いやりの心を養い、グローバルリーダーとしての素養を身に付けさせる。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等  特になし</p> <p>(3) グローバルリーダー育成に関する環境整備，教育課程外の取組内容・実施方法  (ア) 小学校への英語出前授業  (イ) 外国人留学生による母国紹介ワークショップの開催  (ウ) 外国人教員によるグローバル課題ワークショップの開催  (エ) 長期・短期留学の門戸拡大  (オ) 留学生の積極的な受け入れ  (カ) 海外Gap Yearボランティア学生の受け入れ  (キ) 帰国子女の積極的な受け入れ  (ク) 各種コンテストへの積極的な参加  (ケ) インターナショナルデイの開催</p> <p>(4) 幹事校としての取組（該当する場合のみ記入）  なし</p>
<p>⑨ その他 特記事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● アジアスタディーツアーや大学へのスタディーツアーへの共同参加  世界の姉妹大学を中心に研修活動に参加し、グローバルな視野を広げる。</li> <li>● 国連スタディーツアー（Little Raiza Project）参加  国連を中心とした世界の中での我が国及び自らの果たすべき役割等を理解する。</li> <li>● ボランティア活動  梅干弁当募金先の視察やペットボトルキャップ運動の成果を調べる。</li> <li>● 外部機関の講演の聴講および、他者へのフィードバック</li> </ul>

## Active Dialog - 共生の実現へ

情報の収集・分析・考察ができる  
問題解決能力の育成

持続可能な共生社会に貢献できる  
人材の育成

英語・日本語によるディベート能力  
及びプレゼンテーション能力の  
育成

### 研究開発テーマ

#### 人との共生

- ・少数民族問題
- ・移民・難民問題

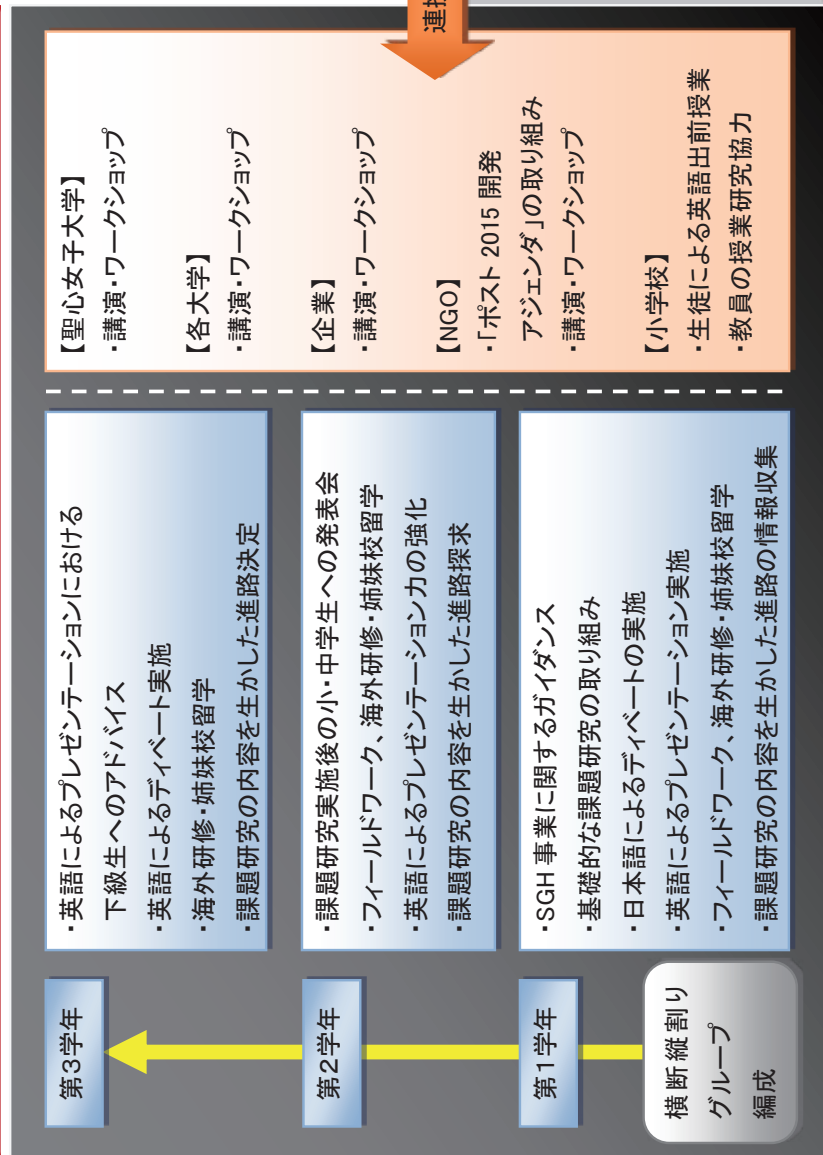
#### 自然との共生

- ・資源(水・ゴミ)問題
- ・食問題

### 検証

- ・アンケートによる自己評価・意識変容の  
追跡調査
- ・ルーブリック・ポートフォリオによる評価
- ・「SGH 実行委員会」の設置

聖心女子大学・各大学・企業・NGO・小学校



ふりがな	さっぽろせいしんじょしがくいんこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	札幌聖心女子学院高等学校		

## 平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		40 人	59 人	69 人	79 人	人	51 人
	SGH対象生徒以外:		69 人	58 人	69 人	4 人	人	人
目標設定の考え方: 校内での呼びかけに答えて、街頭募金活動や、地域のイベント運営スタッフとして参加する人数。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		14 人	20 人	22 人	41 人	人	36 人
	SGH対象生徒以外:		18 人	25 人	11 人	2 人	人	人
目標設定の考え方: 自ら望んで長期・短期留学や海外研修に参加する実人数(隔年でタイ体験研修がある)								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		71%	77%	61%	78%	%	54%
	SGH対象生徒以外:		%	47.9%	78%	95%	%	%
目標設定の考え方: 在学中に、将来そうしたいと考える生徒の人数/在籍者数予想								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		11 人	8 人	8 人	8 人	人	23 人
	SGH対象生徒以外:		12 人	25 人	14 人	6 人	人	人
目標設定の考え方: クラブからの参加による入賞でなく、日々の授業の結果としての英語力による参加による入賞者数。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		%	%	15%	45%	%	42%
	SGH対象生徒以外:		26%	39%	40%	23%	%	%
目標設定の考え方: 全員が卒業時には準2級または2級を取得する。準1級は、なかなか壁が高いチャレンジであるTOEICともに臨ませる。								
(その他本構想における取組の達成目標)								
f	SGH対象生徒:							
	SGH対象生徒以外:							
目標設定の考え方:								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
	24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
a	SGH対象生徒:		(50)60%	55%	60%	60%	65%	58%
	SGH対象生徒以外:		57%	45%	%	%	%	%
目標設定の考え方:25年度については2月4日現在確定者のみ。年によるが卒業生の約半数ぐらいは聖心女子大学に進学し、ほかは推薦や一般受験。								
海外大学へ進学する生徒の人数								
b	SGH対象生徒:		1(準備)人	1人	2人	3人	5人	2.4人
	SGH対象生徒以外:		0人	1人	人	人	人	人
目標設定の考え方:北海道という土地柄もある。実績として隔年で海外大学への進学者が出ていることからの想定。								
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		10%	%	%	%	%	14%
	SGH対象生徒以外:		-	-	%	%	%	%
目標設定の考え方:SGHの「課題研究」の結果として専攻分野を決める生徒が今以上に増えると考えられる。								
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
d	SGH対象生徒:		0人	人	人	人	人	7人
	SGH対象生徒以外:		-	-	人	人	人	人
目標設定の考え方:国際機関やNGO、海外研修を経験し、大学でさらに海外へ行くものが増えていくと考えられる。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	0人	0人	10人	10人	12人	9人	人	16人
目標設定の考え方: 国連研修、およびマングローブプロジェクトへ(隔年開催)の参加者数。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	5人	5人	18人	35人	64人	55人	人	14人
目標設定の考え方: SOFISでの研修参加人数に、SIAIによるNGO研修会参加人数。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	校	校	10校	7校	8校	8校	校	3.2校
目標設定の考え方: SGHの取り組みが進むうちに、提携校が増えると予想している。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	人	人	25人	21人	10人	8人	人	60人
目標設定の考え方: 課題研究のための活動に参加するSHRET大学生やテーマに関する院生が増えると予測している。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	0人	0人	2人	13人	14人	14人	人	2人
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	12人	39人	10人	17人	16人	31人	人	40人
目標設定の考え方: ディベートの勉強を英語のクラスで強化することで力が付き、また参加人数も増えると予測される。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	15人	32人	40人	18人	15人	7人	人	28人
目標設定の考え方: 留学生、GAP YEAR生、帰国子女のより積極的な受け入れをする。隔年でタイ王立高校からグループを受け入れている。								
先進校としての研究発表回数								
h	0回	1回	0回	2回	1回	1回	1回	1回
目標設定の考え方: 地域の小・中・高校および在校生保護者への公開授業・講演・ワークショップ等の発表会。								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i	△	△	○	○	○	○	○	
目標設定の考え方: サイト内の一部が英語に翻訳されている。少しずつ翻訳する部分を増やし、最終的には全面翻訳を目指したい。								
(その他本構想における取組の具体的指標)								
j								
目標設定の考え方:								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	116	105	93	82	87	89	92
SGH対象生徒数			28	56	87	89	92
SGH対象外生徒数			65	26	0	0	0







平成30（2018）年度教育課程の特例に関する資料  
～学校設定科目「グローバルイシューズ」(GI)～

札幌聖心女子学院高等学校

## I. 教育課程の特例とその適用範囲

SGH学校設定科目「グローバルイシューズ」(GI)における「社会と情報」履修内容との関連

教育課程の特例の内容

- ・高校1年では『総合的な学習の時間』1単位と『コミュニケーション英語Ⅰ』を1単位、計2単位を学校設定科目「GI」として平成27年度より設定している。

高1	総合的な学習の時間	1単位	
	コミュニケーション英語Ⅰ	1単位	合計2単位 → 平成27年度よりGI

- ・高校2年では『総合的な学習の時間』1単位と『社会と情報』1単位、計2単位を学校設定科目「GI」として平成27年度より設定している。

高2	総合的な学習の時間	1単位	
	社会と情報	1単位	合計2単位 → 平成27年度よりGI

- ・高校3年では高校2年と同様に『総合的な学習の時間』1単位と『社会と情報』1単位、計2単位を学校設定科目「GI」として平成28年度より設定している。

高3	総合的な学習の時間	1単位	
	社会と情報	1単位	合計2単位 → 平成28年度よりGI

## II. これまでの学校の取り組み

平成26年度よりSGH指定校となり、高1を対象に1年間の実践研究を進めてきた。更に、平成27年度より対象学年を高1・高2の2学年に広げ、翌平成28年には試行も含めてではあるが高校生全員を対象とした学校設定科目「グローバルイシューズ」(GI)を学校設定科目とした。

## III. 社会と情報の履修内容について ～社会と情報の履修内容と学校設定科目「GI」との関連～

1. グローバルイシューズの活動内容として課題研究ミーティングから意見文作成、探究活動の一環として国内研修や海外への短期・長期留学後のICTを活用した報告、メディアによる海外との映像や文字による情報交換を計画している。
2. 課題研究ミーティング、意見文作成  
意見文作成に関連して、情報の収集のために図書館やインターネットなど活用する。事前にネット上の情報の信頼性等、ネット活用の前提としての知識も必要となる。
3. 国内研修や海外留学の報告  
留学した先での体験や、現地での調査内容等を共有するため、報告会を計画している。効果的な伝え方、コミュニケーションの方法、プレゼンなど情報機器の活用についての事前学習を経た後、報告会への流れを計画している。
4. 高1でニューヨーク研修に参加した生徒と、校内で特別プログラムにて活動していた生徒との間で、情報機器を通し、画像やデータ、音声と映像でのリアルタイムの情報交換を行う事ができた。情報交換やコミュニケーションをタイムリーにできるよう、オンライン機器利用の基本事項と共にモラルも含めた学習を計画している。

#### IV. 学習指導要領にある「社会と情報」の内容とその取り扱い

##### 1. 「社会と情報」の内容とその取り扱い

- (1) 情報の活用と表現
  - ア. 情報とメディアの特徴
  - イ. 情報のデジタル化
  - ウ. 情報の表現と伝達
  
- (2) 情報通信ネットワークとコミュニケーション
  - ア. コミュニケーション手段の発達
  - イ. 情報通信ネットワークの仕組み
  - ウ. 情報通信ネットワークの活用とコミュニケーション
  
- (3) 情報社会の課題と情報モラル
  - ア. 情報化が社会に及ぼす影響と課題
  - イ. 情報セキュリティの確保
  - ウ. 情報社会における法と個人の責任
  
- (4) 望ましい情報社会の構築
  - ア. 社会における情報システム
  - イ. 情報システムと人間
  - ウ. 情報社会における問題の解決

##### 2. 「グローバルイシューズ」での取り組みと上記との具体的な関係について

- (1) インターネットや図書館、新聞、テレビなどを活用し、その検索方法や、実際に調べることを通してそのメディアから得られる情報の特性について学ぶ。  
→1－(1)－ア、1－(3)－ア、1－(4)－ア
  
- (2) 得た情報の提供者、もしくは出所を確認し、その信憑性を吟味する重要性を学ぶ。  
→1－(3)－ア、1－(3)－ウ
  
- (3) 得た情報をどのように共有し、保存する方法や適切な媒体について実習を通してその技術や方法について学ぶ。  
→1－(1)－イ、1－(3)－イ
  
- (4) 調べや、得た情報の共有にあたってインターネット環境（メールやSNSなど）を活用する場合、その通信手段の利便性（wi-fi環境）や安全性（ウィルス感染、サイバー攻撃など）について、身近な例を取り上げながら学ぶ。  
→1－(2)－ア・イ・ウ、1－(3)－イ・ウ
  
- (5) 文章による表現以外に効果的な伝達手段である画像や作図等の処理に適切なソフトウェアや道具の選択について、実習を通して技術を修得する。また、著作権使用や個人情報保護について学ぶ。  
→1－(1)－イ・ウ、1－(3)－ウ
  
- (6) 相手に伝えたい内容を効果的に、情報を受け取る側の気持ち（不快な思いをさせないなど）倫理的に問題のない表現を用いることの重要性について学ぶ。  
→1－(3)－ア、1－(3)－ウ、1－(4)－ウ
  
- (7) 情報をネットワーク上に出すにあたり、問題となった事例報告を通じて適切な情報公開の限度や方法を学ぶ。  
→1－(2)－イ、1－(3)－ア・イ・ウ

## 2017年度 第1回 SGH運営指導委員会

**【日時・場所】** 2017年8月29日（火）13:10～15:27  
札幌聖心女子学院中学校・高等学校 第3パーラー

**【主催】** 学校法人聖心女子学院

**【出席者】** [運営指導委員]  
池上 清子氏 日本大学大学院総合社会情報研究科教授  
北原 敬文氏 公益財団法人札幌市生涯学習振興財団理事長  
松坂 ヒロシ氏 早稲田大学教育学部教授  
望月 恒子氏 北海道大学副学長・大学院文学研究科教授

[管理機関]  
石川 明 学校法人聖心女子学院常務理事  
田渕 雅 学校法人聖心女子学院事務局長代理  
田口 雅史 学校法人聖心女子学院事務局長代理

[札幌聖心女子学院]  
阿部 益太郎（校長） 漆崎 琴（教諭）  
構野 秀樹（事務長） 大野 朗（教諭）  
佐藤 拓也（教諭） 松原 今日子（教諭、記録）

### 【議事次第】

（第1部） ニューヨーク国連研修プレゼンテーション（13:10～）  
2016年度に参加した現高2の生徒による発表

（第2部） SGH運営指導委員会（14:00～）

#### 1) 開会

司会：石川常務理事  
挨拶：同上

#### 2) 議事

A) 平成29年度上半期における活動実績についての報告・下半期の活動計画（佐藤教諭）

##### ●28年度からの変更点

①フィールドワーク先の変更

②探究報告書の作成

・生徒の成果をどのように示すかを検討。レジュメでは弱い。もともと持っている調査メモを活用して、完成させる。

・生徒負担が増えないように配慮。

③年度末の事業報告書に添付する予定。

④高3のアクションプランの取り組み時期を早めに繰り上げて開始。

⑤プラン実行のための必要経費調達の方法を創出。

● 下半期の取り組みについて

① 高2英語ディベート

- ・ 授業構築の方法や方向性を確認するアンケートを変更。
- ・ 指導教員の研修、その後のフィードバック。
- ・ 標準クラスについて準備時間の確保。

② ニューヨーク国連研修の事後学習のあり方

- ・ 事前、事後学習にかかる負担。
- ・ 高校2年生の取り組みにも負担となる。この負担の解消を工夫して考えたい。高2のG Iの時間の中に入れ込むことを検討。

B) 質疑応答（下記の【記録】を参照）

3) 閉会

司会：石川常務理事

挨拶：同上

**【記録】**

(第1部) ニューヨーク国連研修プレゼンテーション

**池上委員** プレゼンの内容について、きちんと順序だっていてよかった。話は英語で聞いたのか？

**生徒** 英語で話され、引率の先生が訳してくださった。

**池上委員** どの程度理解できたか？

**生徒** ところどころ、わからないことがあった。

**池上委員** わからない英単語などはあったか？

**生徒** Mission などがわからなかった。

**池上委員** グローバルリーダーの姿を提示していたが、それは話し合ったのか？

**生徒** 自分たちが研修前に考えていたリーダー像とは違った。協力する、話し合いをするということばをよく聞いた。リーダーというのは一人で、ではなく、共に歩むということがわかり、新しい視点を得た。

**松坂委員** 池上先生のご発言に賛成。よいプレゼンテーションだった。略語を確認した。UNHCRは国連難民高等弁務官のことだと思うが、MDGs、SDGsとは？

**生徒** MDGsはミレニアム開発目標を指す。持続可能な開発目標であるSDGsに継続していくものである。(SDGsの内容について説明)

**望月委員** 感心した。大学は専門性をもって学ぶ場所であるが、その糸口はあるか。日本の国の特殊性、日本人のこゝろを感じたか。

**生徒** 自分たちと同じ年代の人が苦しんでいることが衝撃的。難民の子どもたちのアプローチについて考えたい。

**生徒** 見えない状況にいる子どもたちに、教育の機会を。

**北原委員** 研修自体が素晴らしいが、今の受け答えが素晴らしい。その経験が自分のものになっていて、突然の質問について対応できており、フォローをしている姿が素晴らしい。

**池上委員** どうしてユニセフを窓口にしているのだろうか。

**生徒** いろいろな機関の募金方法などを調べたが、子どもへの支援をフォーカスしている団体だと思った。

**池上委員** ユニセフのどの部門に寄付したのか。口座は直接アメリカのものなのか。

**生徒** これからあるバザーでも行う予定なので、まだ振り込みは行っていない。

**池上委員** クッキーは自分たちで焼いたのか。それとも仕入れているのか。

**生徒** クッキーセールは自分たちで焼いて行っている。

**池上委員** ぜひ買わせてほしい。全部売り切れたのか。

**生徒** はい。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～生徒退室：～

**池上委員** この人たちがどのような女性になっていくのかを追いかけてほしい。就職だけではなく、どのような人生を送るのかということについて。自分が享受していることが、当たり前ではないということ、また公平性に疑問を持つこと自体がすごいと思う。

**松坂委員** 高校生の感受性は豊かで、非常に多くのことを感じたに違いないが、その中から情報を取捨選択し、秩序立てて他者に伝えることができているのがよい。

**漆崎教諭** NY国連研修第1期生は、大学1年生になり、望月先生がおっしゃっている専門性をもって学び始めているところである。

**池上委員** これからの文部科学省事業は出てきているだろうか？

**石川常務** そのままなくなることはないと思うが、しかし何も決まっていない。IBがあり、SGHに続き、研究開発事業はある程度出し尽くした感がある。

**(第2部) 議事A・Bに対する質疑応答**

**松坂委員** ニューヨーク研修の生徒の作業が、自然との共生の探究の作業と重なるというお話だったが、その意味はどういうことなのか。

**佐藤教諭** SDGsの中で自然に関係することを選べば、負担が減らせるのではないかと考えている。

**池上委員** ニューヨーク研修は今始まったことではないと思うのだが、今までの経験によって軽減していくことが可能だろうか。生徒も教員も、同じく大変であろうと思う。

**佐藤教諭** 初年度はあまり負担はなかった。しかし2年目以降は間違いなく増えた。それはNYのシスターからの要求や確認があったことが大きい。

**池上委員** 負担軽減のために、事後研修と自然との共生についてどちらかで選べないか。

**佐藤教諭** 文部科学省への提出書類に縛られており、またニューヨーク研修の事後学習がここまでひっぱることになるとは想定していなかった。

**望月委員** 探究報告書について、これは新たな負担となるのではないだろうか。

**佐藤教諭** 材料はすでにあるので、そんなに負担にならない。

**望月委員** 文でまとめることは大切であり、やってほしいことである。しかし、負担が増える一方なのが気になる。

**池上委員** アクションプランをきちんと文書化すること。実験する人が実験ノートをつけているように、そのようなものを作る。大切なのは形ではなく、頭を整理することであろう。高校生は四苦八苦することが想定される。

**佐藤教諭** 高校1年は苦勞するであろう。上級生は大丈夫ではないか。

**池上委員** 自分たちの学びを、エッセイではない形で文で残そうとすることは評価したいが…。アクションプランの実施報告書について、①目的2、3行 ②背景 ③目標を達成すると期待される成果 ④アクションの具体 ⑤いつ、だれが、何をするのか ⑥必要な予算 が入っていれば問題ない。報告書はできたことだけではなく、できなかったことも含めて書く。簡単な項目建てにした方がよいかもしれない。サマリーを書くときよい。

**佐藤教諭** 予想される、期待される変容については報告させたい。また、うまくいったことも失敗したことも検証をした方がよいと思っている。

**池上委員** この報告書を3枚でかけたとしたら、社会で通用する。

**佐藤教諭** AO入試に出願している生徒がいるが、出願書類はかなりの分量を書かなくてはならない。このSGHの取り組みが活きていると思う。何とか完成させることができていた。

**石川常務** 各材料を持っているということ。

**北原委員** 目標達成について、説明はあったか。

**佐藤教諭** 数値化できないと考え、報告文書にかえることを考えた。学年進行で行うことによって、課題の把握については成長が見えていると感じている。問題の本質や着眼点について、進歩が見える。英語の達成目標については、実現が大変困難である。

**北原委員** 数値化は難しいのだが、どうにかして表現していかななくてはならない。目標設定とその達成度について、課題の把握と改善点をきちんと書かないといけない。28年度の活動報告については4点あげている。これは少々謙虚で控えめかと思う。今日のニューヨーク研修の発表を見て、もっと成果を挙げている。ではどのようにそれを表現したらよいのか。はじめと終わりにだけではなく、その中身について、もっと強く表現してもよいであろう。

**阿部校長** おっしゃる通りである。どのように伝えていくか、



**望月委員** 申請書類に対する答え、数値化が困難なのはわかるが、今回の報告については内面化をしている傾向がある。見せ方に工夫はいる。数値化は難しいが、その数値を挙げる仕組みづくりはしている。それをどう見せるかについて工夫したほうがよい。

**石川常務** ものの言い方、数値ではないことをどのように表現するか。文科に出すフォームは決まっているが、それに添付する資料を付けた方がよい。

**池上委員** 名古屋大学大学院でやっていることだが、数値化は困難。最終年度の評価の際に、1年前に評価を実施。第三者の企業に依頼し、学生に面談、アンケートを実施して、意識の変容について調査を行っていた。自己評価を行い、質的な変化を見る。授業内で積極的に手を挙げるが増えたか、友人と一緒に何かをやるか、読書量、関心の広がりなど。このような質問を生徒に聞いてみるのはどうか。

**石川常務** それは賛同したい。一番簡便でよい。自己評価でそれに充てる。客観性は疑問かもしれないが、自意識でどうかということよい。

**北原委員** グローバルイシューズの目標について、G Iの取り組み以前、以後についての確認したらよい。振り返りの形で数年前の事を聞いてみたらよいであろう。

**望月委員** 昨年行ったSGHのディスカッションは、とても良かった。

**松坂委員** 私も同意見である。教育は数値化するのは困難ではあるが、自由に記述したものの中からキーワードを拾い、カウントして分析をしてはどうか。自由筆記であっても、数値化の努力を示してはどうか。地元の社会科学を専攻している学生にその分析をってもらうのも一案。生徒の社会人としての成長、内面の変容についてインタビューし、それを学問的に評価していったらよい。

**池上委員** それはインデクス・サーベイとよぶ。10人ぐらいのグループでディスカッション。頻繁に出てくる言葉、共有している言葉を探して、その人たちの意識がどこにあるかを探ることができる。

**北原委員** 自分がその取り組みをすることでどのような力がついたのか。アンケートで実施し、プラスの要素をピックアップして、それにさらにアンケートを行うのはどうか。

**松坂委員** 数字で出てくるアンケート、面接。この両輪で結論を出す。時間はかかることではあるが、実現可能なことではないだろうか。

**池上委員** Webでやってはどうか。生徒にはなじみがあるし、事後処理が楽ではないか。

**石川常務** 生徒の感想文であったという文科の評価を変えるために、今ご指摘のあったことを活かしていくことができるだろうか。可能な範囲でぜひやってみたらよい。

**佐藤教諭** 努力したい。

**池上委員** タイ研修が追加されているが。

**佐藤教諭** マングローブの植林を通して、日本とタイとの関わりなどを学ぶ。

**池上委員** これは今までもあったのか。

**阿部校長** 隔年で実施している。



**池上委員** 環境として取り組む切り口としてよいと思った。

**松坂委員** 事前にアンケートをとれてないということではあったが、今でも振り返って過去と今の自分を対比させてアンケートを行うことは実行可能であり、ひとつの案。

**石川常務** 29年度の計画について、何か工夫をした方がよいことなどはないか。

**松坂委員** ディベートの準備時間を延ばすのは賢明である。

**北原委員** 目標について、きちんと意識して実行していく方が望ましい。

**漆崎教諭** マングローブ植樹について、共生についてのよいプログラムではある。継続していけばよい。生徒の負担について、反省を繰り返すと事業として膨らむことが多い。1年生の後半からニューヨーク国連研修について、放課後活動によって立つ。これはやはり負担である。卒業後にやってよかったという風に卒業生は思ってくれているようだが、正直相当負担である。

**大野教諭** 本校勤務2年目である。生徒のものの見方が違うということは、前任校と比較しても実感している。本気で取り組むことはやることが増える。学校行事、SGHの発表など、力を抜かずに取り組もうとする。クラスの生徒に聞いてみると、夜中の2時3時まで取り組んでいる。バランスのとらせ方を考えたい。教員の生徒への負荷の与え方について考えたい。

**池上委員** 旧制高校のような話である。よいことであれば真夜中までやるという価値観。

**石川常務** 現実の進路実現との調和が大切。AOには対応できているが、生徒の進路希望と合致しているかどうか分からない。とても難しい問題である。

**池上委員** 公立高校とは違う。私立、中高一貫、カトリック。これは出しても良いと思う。

**石川常務** 一般の保護者のニーズについて合致しているかどうか難しい。

**漆崎教諭** 従来での受験をしたい生徒の勉強時間の確保が課題である。もちろん力をつけているのは確かなのだが。

**大野教諭** 大学入学後には力を発揮できることは予想できる。しかし入るための力を身に付けさせることが困難である。

**北原委員** 新しい学力観については、まさしくこの学校で育てている力である。これが評価されないのは何とも残念なことである。

**石川常務** 100人も200人もいる学校であればうまく住み分けが行われているが、いかんせんこの母数では、なかなか難しいこともある。

以上

## 2017年度 第2回 SGH運営指導委員会

**【日時・場所】** 2018年2月21日（水）  
学校法人聖心女子学院法人本部会議室

**【主催】** 学校法人聖心女子学院

**【出席者】**

[運営指導委員]

池上 清子 氏	長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
北原 敬文 氏	公益財団法人札幌市生涯学習振興財団理事長
松坂 ヒロシ 氏	早稲田大学教育学部教授
小野 友五 氏	北星学園大学経済学部教授

[管理機関]

石川 明	学校法人聖心女子学院常務理事
田渕 雅	学校法人聖心女子学院事務局長代理
田口 雅史	学校法人聖心女子学院事務局長代理

[札幌聖心女子学院]

阿部 益太郎（校長）
構野 秀樹（事務長）
佐藤 拓也（教諭）
北 都子（教諭、記録）

### 【議事次第】

#### 1) 開会

司会：石川常務理事  
挨拶：宇野理事長

#### 2) 下半期における活動実績についての報告（佐藤教諭）

##### ●高2英語ディベートについて（別紙資料あり）

##### ・コース別について

英語力によって2つのコースにわけていたものを、本人の希望で所属するコースをきめた。  
英語力のある生徒が固まらないように、担当教員が声掛けを行った。

##### ・チーム編成

メンバーを入れ替えて行った。

##### ・流れの変更

##### ●高校3年生アンケート・評価の実施（結果分析の資料参照）

・幹事校の筑波大および附属高校から配布されたアンケートを本校用にアレンジを加えながら利用した。

・英語に対して苦手意識があることがわかった。

・様々な活動と両立するには時間が不足していると生徒たちから声が上がっている。

- 3) 平成30年度の事業計画・目標達成及び具体的な活動計画
- ニューヨーク国連研修に参加した生徒の授業時間の利用の変更（SDGsの目標を活用）
    - ・自然との共生について行う
  - 2018年10月5日（金）研究発表会を実施予定
    - ・発表会の講演を計画したい
- 4) 質疑応答（下記の【記録】を参照）
- 5) 閉会
- 司会：石川常務理事  
挨拶：宇野理事長

### 【記録】

**松坂委員** アンケートを行ったことは良かった。学年のいつの時点で実施したのか？

**佐藤教諭** 1月の冬休み明けに実施した。

**松坂委員** 1年間全ての活動を行った結果について、振り返って行ったのか？

**佐藤教諭** そうである。もっと早くに実施したかったが、外部団体との交渉のため前期までで終わらない生徒もいた。そのため、この時期に行った。

**松坂委員** 理想は始める前と終わった後だが、しかし実施したのはよかった。

**池上委員** 3年生だけか？

**佐藤教諭** そうである。またルーブリック評価は各学年で実施している。3年生のルーブリック評価は指導教員と生徒の評価に乖離がある。課題のとらえ方などについて乖離がみえる。アクションプランの立案と実行については、教員側に厳しめの評価が見える。もう少しできたのではないかという思いから厳しくなったのではないか。

**北原委員** 自己評価について、来年度も同じようにやるか？やる場合、入学当初との比較は可能か？例えば、高校3年生に1年生のことを思い返してもらおう。それを行うことで、学年での差、成長の差を知ることができる。また、評価のパーセンテージは出ているが、平均も出すと教師と生徒の意識の差がわかりやすくなる。

**佐藤教諭** 研究報告書にはそのように載せる。

**松坂委員** アンケートの肯定的・否定的というのはセンテンスに対してか？

**佐藤教諭** そうである。幹事校からのアンケートを本校にあわせて変えてみたが、全て直し切れていないところもあった。

**北原委員** わかりにくい部分もある。

**佐藤教諭** 研究報告書には出し方を見直して記載する。

**池上委員** 教員と生徒のルーブリックの乖離については、終わった後にフォローアップをしているか？教員が「1」をつけている場合がいくつか見える。しかし本人は「4」をつけている。その場合は乖離が大きいので、生徒と教員で話し合いをすることや、何が原因だったのかを確かめる必要があるのではないか。

**佐藤教諭** 例えば、コンビニのスプーンの配布の有無について取り上げたグループがあった。いる・いない選択をすることはできるが、はじめから渡さないというのは現実的には難しいことを教員側から話し軌道修正をかけようとしたが、生徒たちはその点にこだわった。その後、自分たちもそのプランは難しいことを理解していた。

**小野委員** 教員の考え方が必ずしも正しいわけではない。生徒の方の考え方にも正しさはある。

**佐藤教諭** この活動の主旨からすると、最初から教員が指導するものではない。ただ途中で助言や修正して生徒が受け入れることは難しい点でもある。

**北原委員** 何を評価するのかについて考える必要があるのではないか。世間の常識にてらして、この学習の中で妥当な判断にいきつくことをよしとするのか、理想に向けて考えていくプロセスを考えていくのか。この学習で求めていることは何なのかを厳密に考えていかないと、教師の助言に従わなかったからという点で、評価が低くなるのはおかしいのではないか。

**池上委員** SDGsは「誰一人取り残さない社会をつくるために、今あることをどのように変革させるか」を子どもたちが考えることが重要である。妥当か、実現可能か、だけではない考え方などを思いつくことも大切だと思う。

**佐藤教諭** アンケートなどの文言については、今後もその都度改良していく。

**池上委員** 28番の質問「相手の気持ちを理解しようとする」というのは国内外で仕事をする上で大変重要なことである。国外で仕事をする人で、「仕事ができる」と思われるのは、『1. 専門性をもっている、自分の考えをもっている』『2. 人に伝えることができる』『3. 相手を理解しようとする・できるか』の3つである。この3つ目にあたる項目が100%なのは大変評価できる。誇りに思っただけの結果である。SGHをやった価値がある。また、97番「仮説を確かめるため、情報やデータを収集することができる」も肯定が83%になっている。仮説を立てられるとは、現状を知り、分析ができていくことである。すばらしいことである。自分の専門以外の学習を行ったということを証明するように、卒業証明書などに自分の勉強した内容を記載してみたらよいのではないか。SGHをやった学年はやっていない学年と時間の使い方が違う。そういうことは可能なのか？

**阿部校長** 今すぐには返答できるものではないので、どう実現できるか検討してみる。

**松坂委員** ディベートを行っていると、「自分の意見は『これ』である、しかし私の意見の欠点は『これ』である。」というように、最後まで生徒に言わせてみるのがよいのではないか。その下地ができていくことはすばらしい。

**佐藤教諭** 生徒達の報告書で、下級生に対して似たようなことを書かせている。

**阿部校長** 今の指摘を受けて、修正できる箇所は修正していく。

**松坂委員** ディベート教育では、ディベートの技術を学ぶのではなく、自分の意見の欠点や粗が含まれていることを意識することが大切である。英語ディベートについて、Aコースはその当日にテーマが与えられているのか？

**佐藤教諭** そうである。

**松坂委員** Bコースはどのくらい時間をかけて一つのテーマについて行っているのか？

**佐藤教諭** 2週間～3週間ほどである。

**松坂委員** 優秀な生徒もじっくり考える機会が必要だと思う。即興ばかりではなく、一度くらいは、落ち着いて論題を眺める時間も与えてあげたらよい。

**北原委員** Aコース・Bコースが片方のやり方だけに染まることはよくない。一つの物事をじっくり考えさせることは大変重要なことである。

**阿部校長** 改善の余地があると思う。担当の教員に伝えておく。

**佐藤教諭** 高校2年生は通常の英語の授業で、じっくり論題を考えてからディベートを行うことは経験している。

**小野委員** どのくらいの時間行っているのか。

**佐藤教諭** 週に2回の英語の授業で実施している。

**小野委員** 日本語のディベートはどのくらい行っているのか？

**佐藤教諭** 高校1年の10月から3月まで行っている。

**小野委員** 英語と同じテーマで、日本語で基本的な考え方を整理してからやったらよいのではないか。提案型のディベートを試してみるのもよいのではないか。色々な意見が出てきて面白い。違いも見えてきて、ディベートもしゃべりやすくなると思う。環境の問題でやる場合は、日本語ではじめたらよいのではないか。英語から始めることは難しいと思う。

**池上委員** 今後の予定（資料4ページ目）に「自然との共生」が多く取り入れられている。

**小野委員** ディベートの内容をこの環境問題と関連できるのか？

**佐藤教諭** ディベートの全部のテーマをこの内容にすることは、なかなか難しい。

**池上委員** ディベートは対立の意見を考えなくてはいけないので難しそうである。

**石川常務理事** 来年度の報告などに活用できる材料をもっておく必要がある。自分自身で振り返ってみるアンケートは活用できると思う。また自由記述で書かせるのも活用できる。

**池上委員** 前期終了ぐらいで行う方が望ましいのではないか。

**小野委員** アンケート調査について、31、34、41の項目はSGHの内容としても重要な項目である。31と41で結果が矛盾している。誇りに思っているのに不安というのが、まだ弱いという感じがする。

**松坂委員** このアンケートのあと、生徒を数名抽出して、ディスカッションさせてみることもできる。本人の中で両方ある理由を聞いてみるのもよい。

**北原委員** 英語を勉強する理由で83などの意図は何なのか。「英語ができると他の人より優れていると思うから」や「英語ができるとかっこいいと仲間から思われるから」というふうに考えるのは違うと思う。何のための質問なのかわからない。

**池上委員** 削除して良いのではないか。アンケートはもう少し精査が必要だと思う。

**松坂委員** 幹事校から送られてきたものをそのまま使っているのか。

**佐藤教諭** いくつかは削除している。しかしこのアンケートを他校も使って報告書にしているのではないかと思っている。

**松坂委員** この項目が出てきたのならば、子どもたちが言っている話を幹事校が抽出して項目にしているのではないか。大人目から見て変だからといって、削除することは止めた方がよいのかもしれない。

**北原委員** このアンケートを何に使うかだと思う。生徒の実態を把握するために必要ならば、この項目も必要だとは思う。今回の取り組みが有効かどうかを測るための指標ならば必要がないのではないか。

**松坂委員** 昔は「かっこいいから」だったのが、現在は変わっているということを知るためのものであれば、データとしては貴重だと思う。

**小野委員** 三年間の評価については、肯定的なのでよいと思う。しかし気になるのは、アンケートの自由記述の多くでスケジュールがきついと書かれていることだ。これは最終年に向けても改善する必要がある。生徒の負担感を減らすための工夫は考えてほしいと思う。

**阿部校長** 調べ学習が他教科からも出されて増えてきているが、改善をできるところはすすめていきたい。

**小野委員** 自然との共生について、一般教科で何か行っているのか？それとも総合学習の時間（GI）で行っているのか？

**佐藤教諭** GIで行っている。環境科学という時間もあるが、特に高校2年生は同時並行でスタートしているので、時間を旨く使えていない。

**小野委員** それはもったいないことである。

**松坂委員** 生徒がうまく時間を使えないようになるのは可哀そうである。アクティブラーニングについて、アクティブな勉強をすると定着力がいいということを生徒に伝えていくといい。生徒の見方も負担ばかりではなく、メリットも知れていいと思う。

**佐藤教諭** GIをはじめたことで、課題について調べたりできるようになったからこそ、先生たちもアクティブな課題を出すようになってしまった。この動きが負担を増してしまった。

**松坂委員** 学校側のバランス感覚の問題である。

**池上委員** 10月5日（水）の論者として推薦できる人が2名いる。伊藤園の関係者（地域との関係、ペットボトル）、東京の区立小学校校長（学習指導要領に関すること）。最後の年に「どのようなことをしたいか」を生徒に意見を聞いてみるのもいいのではないか。SGHの次のことを文科省は何か言ってきているか。

**阿部校長** 1月19日に文科省の説明会に参加したが、現在は決まっていないようであった。

**田淵事務局長代理** 文科省は1年かけて事業検証を行う予定のようだ。指定校に対しても、ヒアリングや実地調査を行うようである。



**石川常務理事** この成果を教育課程に活かすのはまだまだ先ではないか。一体どのような成果があって、どのようなプラス面があったかを聞かれるだろう。

**松坂委員** 評価の物差しの一つに、学校全体を巻き込んでいるかどうかが重要である。学校全体ということは、英語科だけではなく、様々な教科が関連しているかどうかだと思う。報告書に各教科に焦点を当てたことを書く必要があるのか？

**石川常務理事** その可能性は大いにあると思う。英語で話せるだけではなく、自分が何者であるか・自分が何を主張するかを考えていくためには、各教科との連携が必要である。

**北原委員** 学習内容の部分だけではなく、アクティブな学びが各教科に広がっているというのは、評価ポイントになるのではないかと。主張していった方がよい。

**石川常務理事** この活動がほかの教科に及ぼした好影響というの、一つ良い面になるのではないかと。

**小野委員** 既存のカリキュラムの中で、「自然との共生」やよりグローバルな環境社会について、従来の枠組みを取り払った上で教え込んでいるかが重要なのではないかと。既存のプログラムとリンクさせる努力が必要である。その部分がこれまで抜けているように思う。SDGsの目標の7、12、13は重ねることができ、これは地理や生物、化学で教えられるのではないかと。6、14も重ねることができ海洋の問題とリンクできる。そういったやり方を考えていったらよいのではないかと。

**池上委員** 「自然との共生」の波及効果として保健医療、近郊貿易とつながっていく。プラスアルファのことを気が付くといいと思う。それを生徒が気が付くといいと思う。

**小野委員** 貧困の問題とつながると思う。

**池上委員** その通りである。包括的な見方を生徒ができるように指導してあげていったらよいと思う。来年度終わる事業であるからこそ出口戦略が必要である。一つの戦略としては、文学部だけではなく様々な学部に進んだことを言えるといいと思う。二つ目は、各教科にどのようなプラスのインパクトを与えているのかを表すことが必要ではないかと。持続可能性をもって学校に根付いているかが重要である。つまり各教科に活かされているかどうかである。関連する教科にどのように落としこめるのか。4月から理科、社会だけではなく様々な教科を巻き込んで、これらの内容を落とし込めるかということを考えていくことが、評価につながるのではないかと。

**小野委員** 最終年度は1年～3年まで実施するのか。

**佐藤教諭** 3学年すべてで実施する。

**小野委員** そうであれば、各教科に要素を落とし込んでいることを見せる必要がある。環境科学という教科が設定されているのならば、活用の仕方を考えていくとよい。

**北原委員** 各教科ですべてのSGHの目標を入れ込む必要はない。各教科が基礎をつくり、それを応用できるようになるかが必要である。学習指導要領に沿った形で、その枠組みの中で何をどう活かしているのかを精査していくことをやったらよい。全ての授業を組みなおすのは難しいと思うので、現状をしっかりと整理していくところから始めたらよいと思う。

**石川常務理事** SGHの活動が終わってからも何かしらの形で残していくことが必要であり、札幌聖心でもそのことを考えていく必要がある。



**池上委員** 札幌聖心はいいものをいくつも見出している。それをそのまま教科なり、学校の運営や生徒との関係につなげていければよいと思う。

**石川常務理事** 総合学習との関係をどうしていくかも気になる場所である。

**松坂委員** SGHは国際的な活動・仕事ができる人をつくることを目指している。

**池上委員** 多様な職種についているかが問われている。

**北原委員** 様々な場面で能力を活用できる人物を育てていくことが必要である。

**小野委員** なぜSGHができてきたのかという原点を考えていくことが必要である。「持続可能」がキーワードである。これが国際的な常識であり、最低限身に付けてほしいことではないか。地球温暖化問題や貧困問題といった基礎的なことを理解できていて、英語でも説明できることが求められている。目標13がその問題の基本である。そのために、教科で基礎的な知識を教えてあげて、総合の時間でどのように展開していかの筋道を示すことが求められており、作る必要がある。最後の一年で1年次～3年次までの教科の内容もつけて示せるようにすることが大事である。

**池上委員** 難民問題について取り上げているので、社会・倫理などで「人権」について取り上げていることもいえる。ジェンダーの問題は「〇〇の科目で活用している」と言えるはずである。実際やってきたこともあるはずなので、教科とリンクさせていくようにしていく。

**小野委員** シリア、アイヌなどについて沢山やっている。シリア難民に講話してもらったこともあった。ほかの学校にはないことで、札幌聖心の強いところでもある。無理に「自然との共生」にばかりこだわる必要もない。

**宇野理事長** カリキュラムマッピングを活用して、どの学年が何をしているかを見ていくこともできる。学校の中の材料をあつめて、見せ方を工夫していく。

**小野委員** 有機的に様々な科目がつながっていることを教えていくことが重要である。

**北原委員** GIの授業に集まっている内容を、各教科に戻せるかどうかのポイントになる。

**小野委員** 既存の教科との連携の仕方の見せ方を考える。また生徒の負担にならないように考えていく。10月5日の発表会の内容については決まっているのか。

**佐藤教諭** まだ具体的な内容は決定していない。

**小野委員** 発表会では何を目標にするかを今から議論していかなくてはいけない。前回の発表会も、生徒たちはよいレベルまで達している。しかしもう少し教員の指導が入れられたはずである。学校側の目標をしっかり持って、その後の指導をするためにも、早いうち何を行うかを考え、指導プランも考えていった方がよい。

**田淵事務局長代理** ずっと議論になったことは前回の文科省での会議でも話されたことである。SGH事業で臨まれていることは、カリキュラム開発にどのようなつながられるか、教科横断的な仕組みが作れるかが問われている。それについて、具体的に見える形で成果を見せてほしいと言われている。管理機関は実施校がそれを行えるために、金銭面・人権面でフォローしてほしいと言われている。

**田口事務局長代理** ある程度のデータや実績などは集まってきているので、このデータをその後どう活かすかを考えていくことが必要である。

**宇野理事長** カリキュラムにこの活動をどう戻していくか、残して今後につなげていくが必要だと感じた。

以上

平成29(2017)年度 スーパーグローバルハイスクール研究報告書  
平成26(2014)年度指定 第4年次

平成30(2018)年3月 発行

札幌聖心女子学院中学校・高等学校  
〒064-8540

札幌市中央区宮の森2条16丁目10番1号

電話 011-611-9231

FAX 011-612-0980

編集 札幌聖心女子学院SGH研究開発委員会

